

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



茅小屋金山遺跡から湯之奥型石臼出土

9月3日に茅小屋金山遺跡見学会を開催した際、鉦山臼4点が発見されるという大きな出来事がありました。内訳は上臼2点、下臼1点、磨り臼1点で、そのうちの1点は、湯之奥型挽き臼の完形品であったことは特筆すべき事項といえます。

平成元年度からの総合学術調査においては、テラスの位置や大きさ、作業域、石造物の存在などが確

認されましたが、それ以上の詳細調査は行われませんでした。今回の発見は、中山、内山、茅小屋の各金山が同時期に採業していたことを裏付けるものとなりましたが、経年とともに資料の散逸が危惧されるため、早期に発掘調査に取り組むことが求められます。

(学術的意義については2ページ参照)

茅小屋金山遺跡で発見された湯之奥型石臼の意義

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷 口 一 夫

このほど茅小屋金山遺跡で発見された湯之奥型挽き臼「磨り臼」(表紙写真)の資料的価値について紹介したいと思います。

まず、「過去」のを知る方法は、これまで何度か書いてきましたが、①つは、人の生活の中で残された遺構(不動産)や遺物(動産)から知る方法があります。

この遺構、遺物を包括しているところが「遺跡」で、その遺跡の存在そのものが歴史事実ですが、この資料は「沈黙資料」という特性をもち、それだけでは何も語ってくれません。

しかし、その資料を使って歴史を語らせる、これが考古学という学問です。

また、②つは、過去、何らかの必要において文字資料(古文書など)が残されます。これは①と違い具体的に、その時の様子、出来事が文字で分かりますから、考古資料の沈黙に対し「発言資料」と呼ばれています。

その書かれた内容が事実かどうか検証しながら過去のことを知る方法、これが文献史学の方法です。

③つは、その地方に残されている伝統行事、年中行事や民話、伝説、伝承などの中から過去、その地方にどのような歴史事実があったかを求めていく民俗学の方法があります。

④つは、残そうという意志はなかったが、過去における人の営みの中に科学分析することにより明らかになる事実があります。石器なども分析することで、その石材の原産地が明らかになるといった方法(科学技術考古学)で、過去の歴史事実のバールが次々に剥がされています。

こうした④つの方法で、そこに残されている歴史が解明されていきます。

湯之奥3金山・操業開始も同時期

さて、湯之奥金山は中山、内山、茅小屋の3金山を総称しての呼び方ですが、16世紀中頃(西暦1550

年頃)には中山金山は操業されていたことが明らかになっています。これは前述の①考古資料や②文書資料、③民俗資料、それに中山金山跡に残された「汰りカス」などの分析でトン当たり19gもの金を確認された④鉱山技術や科学技術考古学などの「総合学術調査」の成果によるものです。

この時、内山、茅小屋金山跡は発掘調査には至りませんが関連で踏査され、中山同様にテラス(平坦面)の存在、採鉱や粉成の作業が行われた作業域の痕跡などが確認されました。

なかでも内山からは中山と同じ湯之奥型挽き臼の存在が把握され中山と内山は同時期の金山であることが分かりました。

しかし、その内山の下流域にある茅小屋については、テラス内に石造物などが10基ほど存在し人の営みや、金山の操業が行われていた事実は判明しましたが、磨り臼、挽き臼などの遺物がなく、その開始時期が中山、内山と比べどうだったか不明でした。

先に発見された茅小屋金山からの「湯之奥型挽き臼、磨り臼」の存在は、湯之奥3金山がそろって、日本における初源的山金(鉱石からの採金)採掘金山であったことを証明するものとなりました。

今回発見の挽き臼(上臼2、下臼1、磨り臼1)の発見は学術上大変貴重なものとなりました。



最後に内山、茅小屋金山の終わりは、門西家の貞享3年(1686年7月)文書に間歩(坑道のこと)主茅こや村九左衛門から代官にあてた「内山・茅小屋両金山の金が採れなくなったので退転する…」との上申書があり、この時であることが分かっています。

活 動 報 告

1 第4回・5回特別展

当館ではこの夏、2つの特別展を開催しました。

第4回特別展は、7月10日から8月6日の間、下部町文化協会に所属する下部写友会（伊藤義昭会長）のメンバーの日ごろの創作活動の中で生まれた20点の風景写真と、町内外の方々の協力を得て、最も古いものは大正2年のカメラから、昭和50年代のカメラまで約60点を同時展示した、「下部写友会作品展&懐かしのカメラ展」を開催しました。

写真については、富士山を撮ったもの、日の出や



第5回特別展

夕暮れ時、花火などを題材にした瞬間的な作品が多く、観覧者からは「すばらしい」「とてもきれい」という称賛の言葉や感想を多くいただきました。

また、カメラについても、「こんな感じのカメラ、家にもあったなあ」などと感慨深げに観覧される姿が印象的でした。

一方、第5回特別展は、8月12日から9月10日の間、「飯田蛇笏俳句写真展」を開催しました。

これは山梨県立文学館が開館10周年記念として、飯田蛇笏が詠んだ俳句をテーマにした写真を募集した際の、入賞作品47点の写真パネルと蛇笏の直筆原稿をはじめ、著作誌・編集誌など33点を同館からお借りし、展示したものです。

この特別展では、展示スペースの一角に「投句箱」を設け、川柳、俳句、短歌など募集しました。

特別展を見終え、その場で即興的に発句しなければならぬにもかかわらず、多くの方から50点の作品が寄せられました。

「雲母」同人の広瀬町子先生に選をしていただきましたので、秀作を紹介します。

秀 作

広瀬町子選

- | | | | |
|-------|---------|-------|--------------|
| 歩いて | 歩いてもなお | 虫の道 | (下部町・須山和栄) |
| そばすする | 雨上がりけり | 蟬時雨 | (大和市・中川徳子) |
| 葛の花 | 金山跡の | 村静か | (大和市・中川徳子) |
| 湯治場の | 茄子もトマトも | 実りかな | (大和市・中川徳子) |
| 女郎花 | 男郎花咲く | 湯之奥に | (大和市・中川徳子) |
| この山に | 埋蔵の金 | 葛の花 | (大和市・中川徳子) |
| 姪たちと | 歩く下部の | 秋の山 | (竜王町・込山熙並) |
| セミしぐれ | クーラーの風 | 君の顔 | (下部町・小林白秋) |
| 涼しさに | かうべふりをり | 河原草 | (下部町・高野若菜) |
| 湯けむりの | 下部の川面 | 秋立ちぬ | (静岡市・杉山郁次) |
| 思いがけず | 蛇笏句に会ひ | 山の秋 | (静岡市・杉山郁次) |
| この地にて | 飯田蛇笏の | 極む秋 | (静岡市・杉山 茂) |
| 孫背負い | 帰る小径に | 赤とんぼ | (下部町・高野あや子) |
| 蝉しぐれ | 下部川ぞい | 宿の夕 | (竜王町・込山良子) |
| 夏休み | 孫つれて来し | 下部町 | (富士宮市・鈴木スイ子) |
| 穢土寂光 | 蛇笏句を詠む | 送り盆 | (下部町・土橋嘯山) |
| 夏休み | せみさんなけば | にぎやかね | (富士市・佐野文菜) |
| 夏休み | せみがいつぱい | ないてるよ | (富士市・佐野伊津実) |
- 広瀬町子先生評：最後の二句は子供たちの作品ですからこのままで。
大人の方々の作品も、みなさんよく作ってあります。季語が入っていないものや、季語が重なってしまったものなど、惜しい作品もありましたが、それらは若干の添削をさせていただきました。

2 公開講演会

9月2日、産業考古学会鉱山金属分科会と下部町教育委員会を共催に加え、「時代によって異なる働きをみせた金・銀・銅などの金属が、日本の中世・戦国期にはどのような働きを果たしたのか、また、採掘、加工、生産技術とはいかなるものであったのだろうか」という『戦国期の金属生産と技術』をテーマにした講演会を開催しました。

今回お迎えした講師は4人で、各講師とも40分から50分程の時間の中、それぞれのテーマでお話しされました。

1番目の講演は、昨年度の公開講座でも2回講師を務めていただいた金属鉱山研究会会長・村上安正先生が、「金—鉱床と採鉱」というテーマのもと、有史以来の金産出量、金鉱床の種類、採鉱から精錬までの金属鉱山の生産工程などについてお話しされました。

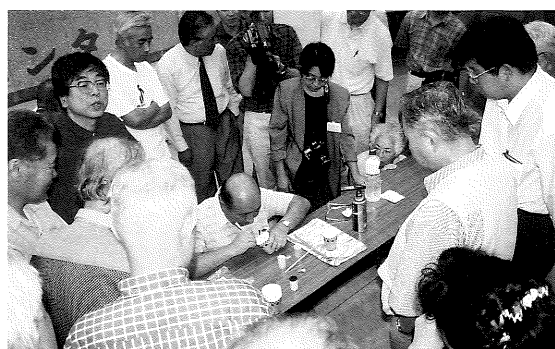
2番目の谷口一夫館長は、「茅小屋金山遺跡について」というテーマで、講演会の翌日は茅小屋金山遺跡見学会を実施するということもあり、予習的な感じで遺跡についてお話しされました。

次に、「戦国時代を推し進めた金属とその生産」についてお話ししていただいたのが、神奈川大学講師であり産業考古学会鉱山金属分科会代表の佐々木

稔先生。物静かな語りで、その時代と金属の関わりをお話ししてくださいました。

最後に「小判の製法と復元」についてお話していただいたのは、和光金属研究所所長・伊藤博之先生。

伊藤先生の講義の中では、復元した小判を手にしを試みたり、当時の造幣技術の中にあつた「色揚げ」という技法を、簡易バーナーや割り箸など身近で簡単な器具を用いて実験してくださいました。所要時間としては約15分程の実験でしたが、実験そのものをその場で見る事ができたことは、理科の授業のような感覚で、聴講者の興味を集めていたようです。



色揚げ実験

今回は、下部町中央公民館を会場とし、約50人が聴講されましたが、各先生方の興味深いお話しゆえ、約3時間半の間、飽きを感じさせない講演会となりました。

3 茅小屋金山遺跡見学会

9月3日、恒例の金山遺跡見学会を開催しました。

これまで、毎年見学会を開催し、湯之奥中山金山遺跡には3回、塩山市の黒川金山遺跡には1回訪れましたが、今年は湯之奥茅小屋金山遺跡を見学地として選定し、町内外から約30人が参加しました。



茅小屋金山遺跡は、中山金山が標高1400～1650m

という高い場所にあるのに対し、標高850mという低い場所に位置し、傾斜もなだらかで比較的登りやすく、一行は出発から1時間程で現地に到着することができました。

現地では、谷口館長の説明を聞きながら、遺跡中心部のテラスや窯跡を見学しましたが、特に、作業区域付近では集積した大量のズリを興味深そうに観察していました。

また、今回の見学会では、鉱山白4点の発見がありましたが、この白の供給孔に詰まった土を採集し、汰り分けをしてみるとという光景も見られました。

道中、川を渡らなければならない箇所があり、それなりに苦労はあったものの、石臼の発見があったり、参加者にとっても印象に残る見学会になったのではないのでしょうか。

平成11年度入館者は16,744人

当館の平成11年度中の有料入館者は16,744人を数えました。

内訳は、小学生以下が1,426人（8.51%）、中学生が408人（2.44%）、大人が14,910人（89.05%）となっています。

全入館者のうち砂金採り体験者は6,476人で、率は38.68%となっています。

また、平成11年度中の開館日数は310日でしたので、1日平均54人が入館されたこととなります。

一方、前年度の有料入館者は17,145人でしたので、人数で401人、率で2.34%の減を示しています。

このほか、行政視察、旅行会社の下見などによる無料入館者は464人を数えました。

月別入館者数は次表のとおりです。

平成11年度資料館利用状況

年月	開館日数	区分	有 料 入 館 者				無 料 入 館 者	年月	開館日数	区分	有 料 入 館 者				無 料 入 館 者
			観覧券	体験券	共通券	合 計					観覧券	体験券	共通券	合 計	
11. 4	26	大 人	1,003	76	172	1,251	12	11. 11	26	大 人	1,297	144	303	1,744	103
		中 学 生	34	3	43	80				中 学 生	2	2	1	5	
		小 学 生	36	36	36	108				小 学 生	51	34	15	100	
		小 計	1,073	115	251	1,439				小 計	1,350	180	319	1,849	
5	27	大 人	1,125	197	484	1,806	5	12	23	大 人	417	63	183	663	21
		中 学 生	17	21	39	77				中 学 生	3	0	3	6	
		小 学 生	51	87	75	213				小 学 生	16	27	1	44	
		小 計	1,193	305	598	2,086				小 計	436	90	187	713	
6	25	大 人	649	94	285	1,028	89	12. 1	26	大 人	433	50	99	582	5
		中 学 生	1	4	5	10				中 学 生	4	1	1	6	
		小 学 生	19	26	26	71				小 学 生	10	14	20	44	
		小 計	669	124	316	1,109				小 計	447	65	120	632	
7	27	大 人	662	147	304	1,113	27	2	25	大 人	437	51	403	891	5
		中 学 生	1	8	10	19				中 学 生	3	2	1	6	
		小 学 生	18	39	48	105				小 学 生	5	7	12	24	
		小 計	681	194	362	1,237				小 計	445	60	416	921	
8	27	大 人	1,117	312	649	2,078	39	3	26	大 人	586	58	217	861	17
		中 学 生	48	31	64	143				中 学 生	20	5	12	37	
		小 学 生	49	173	184	406				小 学 生	26	47	32	105	
		小 計	1,214	516	897	2,627				小 計	632	110	261	1,003	
9	25	大 人	886	104	213	1,203	110	合計	310	大 人	9,816	1,532	3,562	14,910	464
		中 学 生	3	1	6	10				中 学 生	137	80	191	408	
		小 学 生	19	10	14	43				小 学 生	315	538	573	1,426	
		小 計	908	115	233	1,256				小 計	10,268	2,150	4,326	16,744	
10	27	大 人	1,204	236	250	1,690	31								
		中 学 生	1	2	6	9									
		小 学 生	15	38	110	163									
		小 計	1,220	276	366	1,862									

6万人目入館者達成

博物館の開館以来、1万人ごとの入館者をお迎えするたびに、そのお客様に記念入館者として記念品を差し上げてきましたが、7月1日、めでたく6万人目の有料入館者を迎えることができました。

これまでの記念入館者は、偶然にも全員が県外にお住まいの方でしたが、今回初めて山梨県内の方が記念入館者となりました。

この方は、都留文科大学の学生の大塚あいさん。

大塚さんは大学の課外学習のため、40人ほどで当館へ来館する予定でしたが、仲間たちよりも1便遅い電車となったため、皆より一足遅れて来館したという偶然が功を奏して見事6万人目となりました。

大勢の学友たちの前で、館長から記念品を手渡された大塚さんは、照れ臭そうに「まさか自分にこう

いうものが当たるなんて思いもよらなくて、大変びっくりしました。」と感想を述べてくれました。

館内学習後、学生たちは砂金採り体験も楽しんでくれましたが、これらのことが良い思い出のひとつになれば、館としても大変喜ばしいことです。



湯之奥／中山金山遺跡の総合学術調査時に出土した金山道具や、湯之奥門西家に伝承品として保管されていた木製の道具（フネ、セリ板）などについては、日本各地で確認事例が極めて少なく、名称や用途等について判然とせず、金山研究者の間において議論が交わされてきましたが、これらの資料の解析については江戸時代の絵師・佐々木藍田が描いた「金山御山大盛之図」に負うところが大きいものでした。（セリ板の用途については館だより第2号参照）

このことについては、平成11年3月から約1か月半の期間、多くの方々の協力を得、第2回企画展「岩手金沢金山と絵師佐々木藍田の世界」を開催し、この鉱山絵巻を多くの方々に見ていただくことができました。この鉱山絵巻には、叩き石や挽き臼の手前に置かれた鉱石を入れたフネや泥状になった鉱石が流れ出たところに置かれたセリ板など、どのように使用されたかが克明に描かれています。また、描かれた道具類が出土品のそれと一致していたことから、湯之奥金山博物館展示構成や復元模型に非常に有効な手がかりを与えてくれました。また、金山研究の足がかりを作った大変貴重な資料として現在、岩手県大槌町の文化財にも指定されています。（館だより第8号参照）

下部町では昭和44年、その家屋形式を現在に伝えるべく国指定重要文化財となっていた湯之奥・「門西家住宅」の老朽化を防ぐため、解体修理が行われましたが、その際、門西家の天井裏からフネ2基とともに11枚のセリ板が発見されました。発見当初はどのように使用されたものなのか分からなかったセリ板も、上記のような経緯で使途判明に至り、そのうちの6枚を寄託品として当館で預かり、うち2枚を常設展示室にて公開しています。

セリ板に関しては、湯之奥金山調査時には全国で15枚しか確認されていませんでしたが現在、その後の鉱山研究が進み始めたその勢いに乗って、かつて操業されていた金山のあった全国各地から、新たに発見されたというニュースが届きます。

今年、岩手県の地方新聞「岩手タイムス」（1月

19日付）のトピック記事には、陸前高田市内の旧家から見つかったセリ板のニュースが「幻の金山道具」として大きく取り上げられました。「幅約30センチ、長さ約60センチ、杉材で、1枚板に枠を付け、板面に斜め格子

状に鋸目が入っているものが3枚、縦に連結して使ったらしく、繋ぎ目の溝が切つてあるもので、同家の土蔵からは同様のものが7、8枚見つかったものの虫喰いがひどいため比較的保存状態のよい3枚を同市立博物館に寄贈した」ということでした。

湯之奥のセリ板は2枚1セットですが、陸前高田市で発見された3枚1セットと考えられるセリ板のように、必ずしもその形態を同じくしているというわけではなく、地域によって若干の差異があるということも分かってきました。

これまで、セリ板の確認事例が極めて少なかった理由の一つとして、挽き臼や磨り臼などの石材道具と違い木材道具の場合、長い年月の間には腐食や害虫被害などで後世に伝わりにくいということを挙げることができます。

現時点では、門西家の11枚のほかに、長野県で2枚、茨城県で1枚、福島県で1枚、新潟県で3枚、岩手県で6枚、秋田県で1枚の発見が確認されています。（学芸員：小松美鈴）



私の研究ノート③

湯之奥金山・富士（麓）金山の金山衆

高岡伸五（湯之奥金山博物館友の会会員）

「私の研究ノート」①（館だより第11号）で、湯之奥中山金山の開始時期、②（館だより第12号）で穴山氏の金山（中山・麓）との関わりについて、述べさせていただきました。今回の研究ノート③は①②を踏まえた上で「湯之奥金山・富士（麓）金山の金山衆」の実像に触れてみたいと思います。

既に中山金山にとって極めて重要な3通の文書（穴山信君からの1、永禄11年（1568）の「中山之郷出入りする荷物の通過…」、2、武田家からの元亀2年（1571）の「中山之金山衆拾人に対して、粉子150俵…」、3、穴山勝千代からの天正11年（1583）の「河口六左衛門尉に宛てた棟別緒役免除…」）は、17世紀に駿河国駿府藩の役人が当時の文書を正確に写した判物証文写（内閣文庫蔵）としてまとめたものが現存します。3通の文書とも役人によって小さな文字で注記書きされている部分があり（谷口館長から助言）、確かに3通目の文書の注記には「武田

家証文…河口六左衛門子孫…富士郡…北山村市郎右衛門…」とありました。川口の川は文書は河になっていますが、2つの解釈ができます。本来「川」なのに「河」になっていたため、市郎右衛門が申し出たのか、文書自体の「河」が正しいのに、注記の方で「川」に間違えたか、ということになります。この市郎右衛門は慶安3年（1650）の文書に「河内内山市郎右衛門」（門西家文書）として登場します。中山金山の河口六左衛門尉から数えて67年後、子孫の市郎右衛門は内山金山で仕事をしていたということになります。いずれも駿河国の人達です。

さて調べていくと湯之奥金山の金山衆、富士（麓）金山の金山衆の名前が次から次へと出て参ります。内容は今後詳細に検証していく必要がありますが、研究の素材として現時点でわかるものを提示してみました。

- (1)天文20年（1551） 富士（麓）金山の操業と金山衆（太田掃部丞）を確認。
- (2)永禄10年（1567） 中山之郷（中山村）の成立。
- (3)元亀2年（1571） 中山之金山衆10人（氏名不詳）の存在を確認。
- (4)天正2年（1574） 穴山氏家臣、平岡民部丞は富士（麓）金山の金山衆か。
- (5)天正5年（1577） 富士（麓）金山の金山衆（竹河肥後守、藤左衛門）を確認。
(8)の資料から藤左衛門の氏は竹川藤左衛門とみられる。
- (6)天正8年（1580） 穴山氏家臣、有泉昌輔は富士（麓）金山の奉行か。金山衆（望月弥助）を確認。
- (7)天正11年（1583） 中山之金山衆（河口六左衛門尉）を確認。
- (8)天正11年（1583） 富士（麓）金山へ太田伊賀守、竹川藤左衛門、石川佐渡守の関わりと金山衆22人の存在を確認（中山の10人とのダブリも推測できる）。
- (9)慶長7年（1602） 中山金山の掘間と金山衆、富士（麓）金山の掘間と金山衆が確認される。中山金山（興左衛門、善兵衛、半左衛門）の3名と富士（麓）金山の（将監、雅楽助（石井?）、甚之助（志村?）、半左衛門（井出）、藤兵衛、源造、新左衛門、孫衛門、民部尉（平岡?）、彦之尉、右近助、宮内左衛門）等12名が確認される。半左衛門は中山と麓に掘間をもつ。民部尉は2つの掘間をもつ。
注1、半左衛門は井出半左衛門と考えられる。
注2、中山金山は志村甚之助の支配、富士（麓）金山は竹川甚八郎による支配が想定できる。志村も金山衆の1人。
- (10)慶安5年（1650） 中山金山、内山金山の金山衆7名を確認。中山は武兵衛、八郎左衛門、里兵衛、作左衛門、五右衛門。内山金山は市郎右衛門、二右衛門。
- (11)貞享3年（1686） 茅小屋金山金山衆（九左衛門）を確認。
- (12)貞享4年（1687） 内山金山金山衆（半兵衛）を確認。
注1、半兵衛は駿河記（駿河史料）によると竹川肥後守の子孫であると思われる。

参考資料 湯之奥金山遺跡の研究、金山史研究第1集、湯之奥金山と門西家文書（堀内亨）、武田氏と金山（戦国～江戸時代の湯之奥金山と湯之奥村）（堀内亨）、静岡県史料（駿河記、駿河史料）など。

公開講座のお知らせ

我が国の産金と金銀貨

…湯之奥金山の産金と貨幣を考える…

通算回	期 日	演 題	講 師 名
第16回	平成12年 10月21日(土)	近世：金貨の時代来たる	白梅学園短期大学 講師 西 脇 康
第17回	11月18日(土)	江戸時代の黄金・貨幣観	早稲田大学 教授 深 谷 克 巳
第18回	12月16日(土)	甲州金から慶長小判へ	兵庫埋蔵銭調査会 代表 永 井 久美男
第19回	平成13年 1月20日(土)	金銀銭貨の出土資料	出土銭貨研究会事務局 顧問 尾 上 実
第20回	2月17日(土)	生活の中の金貨 …江戸時代の価値に迫る…	千葉大学 講師 加 藤 貴

主 催 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
下部町教育委員会

会 場 湯之奥金山博物館多目的ホール（JR身延線下部温泉駅下車・徒歩約3分）

時 間 午後2時～午後4時

受講料 無料

その他

◎ 博物館見学及び砂金採り体験希望者には割引券を用意いたします。

◎ 気象条件や講師の都合等により日程が変更される場合がありますので、その都度博物館へお問い合わせのうえ御来館ください。

館 からの お 知 ら せ

ホームページ・Eメールを開設しました

当館のホームページとEメールが開設されました。

施設の紹介、金に関すること、金山での作業のことなど、主に展示に関する記事を載せていますが、

新情報も入手次第ページ更新するなど、内容の充実

を図っていきますので覗いてみてください。

また、Eメールにもお便りください。

<http://www2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/>

kinzan@town.shimobe.yamanashi.jp

編 集 後 記

今年は例年よりも残暑が厳しく、いつまでも蒸し暑い日が続きました。また、関東甲信地方では予想外の豪雨にも見舞われ、天気というものは分からな

いものです。

そうは言ってもそろそろ秋も深まりを見せる頃、気候的には1年のうちで最も過ごしやすい季節です。勉学の秋、趣味の秋、そして食欲の秋と、夏とはまた違う「秋」の楽しみが待っています。

博物館だより

第14号

平成12年9月30日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015

博物館ホームページアドレス <http://www2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/>

博物館Eメールアドレス kinzan@town.shimobe.yamanashi.jp